マムルーク朝前期上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱

松田俊道

東洋学報

はじめに

マムルーク朝が政権を樹立して以来，上エジプトの遊牧民は繰り返し反乱を起こしてきた。これらの反乱はマムルーク朝社会全体を揺り動かすには至らなかったが，マムルーク朝にとっては反乱を制圧し，反乱の主体となった遊牧民を体制のなかにどの様に組み込むかは大きな問題であった。

マムルーク朝時代の遊牧民の反乱を最初に取り扱ったのはポリアクであり，彼は「マムルーク朝時代におけるエジプトの民衆反乱」(1) と題する論文の中で，マムルーク朝時代の民衆による反乱を三つのカテゴリーに分類している。すなわち，ウルバーン ‘urbān と呼ばれる遊牧民と農民による反乱，都市の貧しい民衆 al-‘awāmm による反乱，カイロにおける奴隷の反乱である。また，ガルサン(2)やサーリフ(3)も同様のテーマを扱ったが，基本的にはポリアクの成果を大きく越えるものではなかった。

ポリアクによれば，マムルーク朝時代に起きた反乱は，個々の反乱が，社会的にも地理的にも時系列的にも孤立していて，かつてカルマト派が起こした反乱（900-907 A.D.）のように，農民，遊牧民，職人，小商人などの社会体制に対する全ての不満分子を結合して組織されたものではなかった。ポリアクはこの違いを社会経済的関係の変化によるものとする。すなわちカルマト派やザンジュの反乱（869-883 A.D.）の際には，反乱の組織の中に，反乱を支える資金や下層民の結集がみられたが，マムルーク朝時代の反乱にはそれらがなかった。カルマト派の時代は貨幣の流通が普及した時代であった

が，マムルーク朝時代は，租税の支払は下エジプトでは金納も行われたが，上エジプトやシリアでは物納が行われていた。また国庫が逼迫した時は，地方官吏による必要額の徴収，財産没収，悪貨の発行などが行われた。このため，アミールや商人などの富裕層は商業や農業に投資をせず，金銭を退蔵した。しかし相続による資本の集中は発展しなかった。というのはアミールたちは突然財産没収を被ることもあったし，マムルークの世代交替で世襲による土地貴族が生まれなかったからである。またアミールたちはより集約的な農業経営を行おうとしなかった。なぜならば，アミールたちのイクターは，軍功によりしばしば入れ代えが行われたし，イクターから得られる収入は身分に見合ったものを越えることは許されなかった。したがって，ザンジュの乱の時代のように奴隷を使って耕作を行う大農地がなかった。ポリアクは，こうした理由からマムルーク朝時代の民衆反乱が孤立していたことを指摘し，そして，遊牧民と農民によって引き起こされた反乱は一般的にイクター保有者の穀物倉庫を襲撃して穀物を奪取したり，焼打を行ってイクター保有者に損害を与えたり，ハラージュの軽減を求めて行われたという点で，反乱が経済的要因で引き起こされたことを論じている。

本稿では，マムルーク朝の政権樹立以来上エジプトにおいて繰り返し起こされたアラブ遊牧民の反乱は，ポリアクのいう経済的要因よりもむしろ，マムルーク体制が生み出したきわめて政治的な運動であったことを明らかにしたい。そしてマムルーク朝が，上エジプトで発生したこれらの遊牧民の反乱を制圧する過程で，上エジプト支配を確固たるものにしていったことを明らかにしたい。

本稿で使用した主な史料とその略称は以下のとおりである。

Badā'i'

Muḥammad b. Aḥmad b. Iyās, *Badā'i' al-Zuhūr fī Waqā'i' al-Duhūr,* 5 vols., M.Muṣṭafa ed., Wiesbaden, 1960-75.

Bayān

Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī, *al-Bayān wal-I'rāb 'an mā bi-Arḍ Miṣr min al-A'rāb*, Ibrāhīm Ramzī ed., al-Qāhira, 1916.

Baybars al-Manṣūrī

Baybars al-Manṣūrī, *Zubda al-Fikra fī Ta'rīkh al-Hijra*, MS. British Library, Add. 23325 II

Ḥawādith

Abū al-Maḥāsin Yūsuf Ibn Taghrībirdī, *Ḥawādith al-Duhūr fī Madā al-Ayyām wal-Shuhūr*, 4 vols., W. Popper ed. Berkeley, 1930-1942.

Ibn al-Furāt

Nāṣir al-Dīn Muḥammad Ibn al-Furāt, *Ta'rīkh al-Duwal wal-Mulūk*, vol. VII-IX, Bayrūt, 1936-42.

Ibn al-Jī'ān

Ibn al-Jī'ān, *Kitāb al-Tuḥfa al-Sanīya bi-Asmā' al-Bilād al-Miṣrīya*, al-Qāhira, 1898.

Ibn Khaldūn

'Abd al-Raḥmān Ibn Khaldūn, *Kitāb al-'Ibar*, 7 vol., Bayrūt, 1959-61.

Kanz

Abū Bakr Ibn Aybak al-Dawādārī, *Kanz al-Durar wa-Jāmi' al-Ghurar*, vols. 7-9, al-Qāhira, 1960-1972.

Khiṭaṭ

Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī, *Kitāb al-Mawā'iẓ wal-I'tibār bi-Dhikr al-Khiṭaṭ wal-Āthār*, M. G. Wiet ed., 9 vols. al-Qāhira, 1911-1924.

Nihāya

Abū al-'Abbās Aḥmad al-Qalqashandī, *Nihāya al-Arab fī Ma'rifa Ansāb al-'Arab*, Ibrāhīm al-Abyarī ed., al-Qāhira, 1959.

Nujūm

Abū al-Maḥāsin Yūsuf Ibn Taghrībirdī, *al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wal-Qāhira*, vols. 1-12, al-Qāhira, 1963, vols. 13-16, 1970-1972.

Qalā'id

al-Qalqashandī, *Qalā'id al-Jumān fī al-Ta'rīf bi-Qabā'il 'Arab al-Zamān*, al-Qāhira, 1964.

Ṣubḥ

Abū al-'Abbās Aḥmad al-Qalqashandī, *Ṣubḥ al-'A'shā fī Ṣinā'a al-Inshā'*, 14 vols., al-Qāhira, 1963.

Sulūk

Taqī al-Dīn Aḥmad al-Maqrīzī, *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifa Duwal al-Mulūk*, vols. 1-2, M. M. Ziyāda ed., al-Qāhira, 1939-1958, vols. 3-4, S. A. 'Āshūr ed. al-Qāhira, 1970-1973.

Ta'rīf

Ibn Faḍl Allāh al-'Umarī, *al-Ta'rīf bil-Muṣṭalaḥ al-Sharīf*, Bayrūt, 1988.

Zetterstéen

Zetterstéen ed., *Beiträge zur Geschichte der Mamlukensultane*, Leiden, 1919.

Zubda

Ghirs al-Dīn Khalīl al-Ẓāhirī, *Kitāb Zabda Kashf al-Mamālik*, P. Ravaisse ed., Paris, 1894.

1. エジプトのアラブ遊牧民

(1) アラブ遊牧民のエジプト移住

アラブ・ムスリム軍の征服運動と共に，アラビア半島から多数のアラブ遊牧民がエジプトに移住してきた。彼らは7世紀以来数世紀に亘ってシナイ半島や紅海を経由して，ナイル・デルタや上エジプト(4)に住みつくようになった。彼らの由来や系統，移動の経緯，移動後の居住地などに関しては，マクリーズィーの *Bayān* やカルカシャンディーの *Nihāya*, *Qalā'id* に比較的まとまった記述が見られる(5)。その主なものは表1のようにまとめることができる(6)。

エジプトに移住してきたアラブ遊牧民は，大きく二つのグループに分けることができる。すなわち，カフターン Qaḥṭān（南アラブ）

表1　上エジプトのアラブ遊牧民の分布

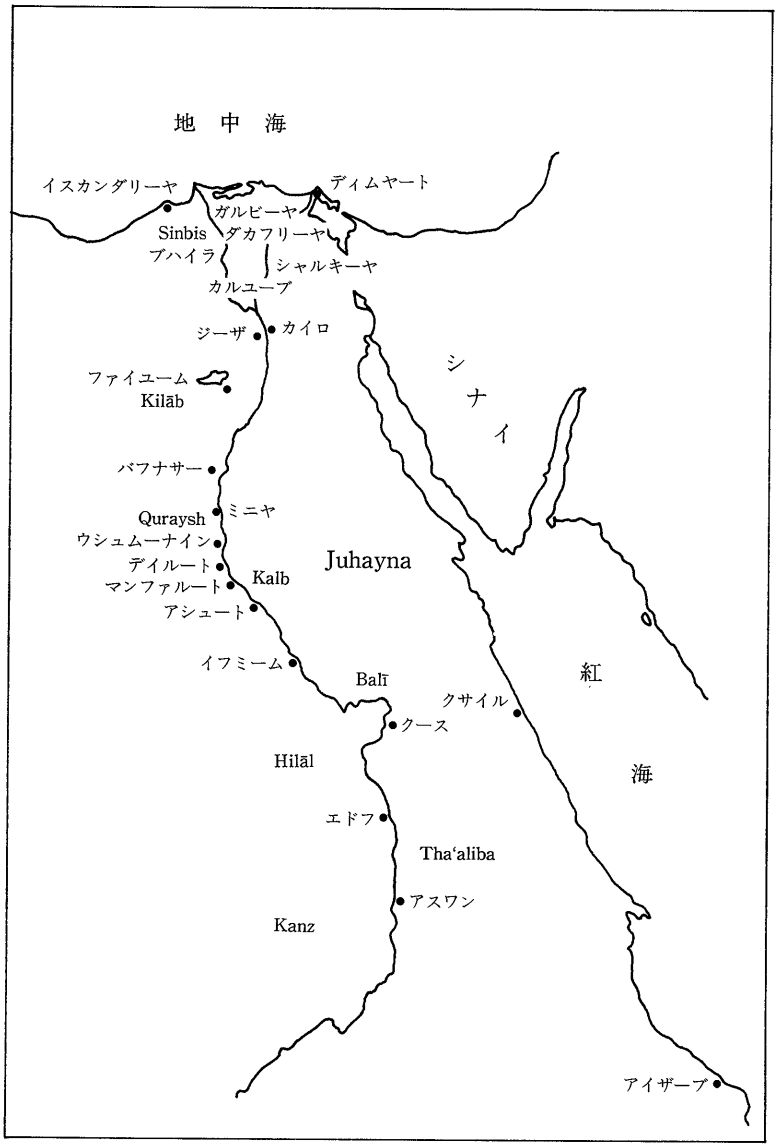
	Qaḥṭān	ʻAdnān
1 ʻAmal al-Jīza	Banū Sinbis	Banū ʻAbd al-Raḥmān b. ʻAwf
2 al-Iṭfīḥ	Banū Lakhm	
3 al-Fayyūm		Banū Kilāb Banū Sulaym
4 al-Bahnasā	Banū Nuddān Banū Lakhm	Banū Makhzūm Banū ʻAbd al-Raḥmān b. ʻAwf Banū Fazāra
5 al-Ushmūnayn	Banū Juhayna	Banū Quraysh
6 Manfalūṭ	Banū Juhayna Banū Ḥammād Banū Ṭimāḥ	Banū Anṣār
7 al-Suyūṭ	Banū Juhayna Banū Balīy Banū Lakhm	Banū Jaʻāfira
8 Ikhmīm	Banū Juhayna Banū Balīy Banū ʻAmr Banū Ṭayy'	Banū Hilāl Banū Kināna
9 Qūṣ	Banū Balīy	Banū Hilāl
10Uswān		Banū Rabīʻa Banū Kanz Banū Hilāl
11ʻAydhāb	Banū Balīy	Banū Yūnis

下エジプトのアラブ遊牧民の分布

	Qaḥṭān	‘Adnān
1 ‘Amal al-Dawāḥi	Banū Lakhm	
2 al-Qalyūbīya		Banu Fazāra
3 al-Sharqīya	Banū Judhām Banū Ṭayy’ Banū Juhayna	Banū Nifāya Banū Wā’il
4 al-Daqhlīya al-Murtāḥīya	Banū Ḥamārina Banu Khalīfa Banū Judhām Banū Firās	
5 Tannīs Dimyāṭ	Banū ‘Udhr Banū Sinbis	Banū Kinānat Khuzayma Banū ‘Adyy
6 al-Gharbīya	Banū Sinbis	
7 al-Munūfīya		
8 al-Buḥayra	Banū Abān	Banu Khafāja Banū ‘Abāda Maṣfūfa
9 al-Iskandarīya	Banū Judhām Banū Lakhm	

とアドナーン ‘Adnān（北アラブ）である。南北アラブはイスラーム以前から伝統的に対立しており，ウマイヤ朝時代にもシリアやジャズィーラで両派に分かれて抗争をしたといわれている(7)。そして両者の伝統的な部族対立は上エジプトに移住してきたアラブ遊牧民たちの間にもそのまま残されており，マムルーク朝時代にもそれは続いていた。

アラブのエジプト征服の際，エジプトに移住してきたアラブ遊牧民の大多数は Qaḥṭān（南アラブ）に属する，Sabā‘ 族の一族であった。Juhayna, Balīy, Kalb, Judhām, Lakhm, Tayy’ (Sinbis,



マムルーク朝時代のアラブ遊牧民の分布図(8)

Tha'laba, Jarm はタイイに属する)，Azd, Ghassān, Ḥuzā'a などがその主な部族である[9]。上エジプトで有力なものは，Juhayna, Balīy であった。Juhayna はヒジャーズから移住してきた最初の部族で，ファーティマ朝時代にイフミーム付近に住みつき，上エジプトでは最大の部族となった[10]。Balīy はアラブのエジプト征服軍と共に移住してきたが，その大部分はシリアにいた Quḍā'a 族が，カリフ・ウマルの命令でエジプトに移ってきたものである[11]。

一方，'Adnān（北アラブ）系の遊牧民は，Quraysh 族に属する Banū Maḫzūm と Banū Umayya などを除けば，大征服の時代から遅れて移住を開始した。65（683-4）年ウマイヤ朝カリフ Marwān b. al-Ḥakam の移住許可により，Quraysh 族が移住を開始した。彼らは以後継続的に移住を行い，特にファーティマ朝時代，前述の Juhayna 族，Balīy 族との勢力争いに勝利してからは，ウシュムーナイン付近に住みつくようになった[12]。また Hilāl 族は109年に[13]，Kanz 族は240年に移住してきた[14]。以上にあげた部族が上エジプトでは影響力を持っていた。そして，一般的にカフターンはナイルの東側に，アドナーンはナイルの西に勢力範囲を持っていた。

エジプトに移住してきたアラブ遊牧民は，様々な形で定住社会に影響を与えた。彼らのなかには移住後も純粋に遊牧を続ける者もいれば，農民として定着する者もいた。また，穀物やその他の商品の運送業に就く者もいれば，商人になる者もいた。移住後も部族形態を残したまま純粋に遊牧を行う者や遊牧のかたわら農耕を営む者はウルバーン（'urbān）と呼ばれていた。彼らは武力や起動性を持っており，体制には反抗的であった[15]。

表1で両者をグループ化したのは，マムルーク朝政権が，同政権に対して起こされたアラブ遊牧民の反乱を制圧する過程で，両者の対立関係をうまく利用したからであり，また，彼らの反乱とマムルーク政権による制圧を考える上で重要であると思われるからである。

(2) エジプトにおけるアラブ遊牧民の社会的役割

648 (1250) 年に政権を樹立したマムルーク朝は，アイユーブ朝時代のイクター制を踏襲し，マムルークたちにイクターを授与することで，国家体制を確立した。そして，エジプト各地に総督 (wālī) を徐々に派遣し，行政区に編成して体制の強化を図った。上エジプトでは 651 (1253-4) 年にクースの初代の総督として 'Izz al-Dīn al-Aframが派遣された[16]。しかし，こうした体制を確立したマムルーク朝にとって，体制に反抗的な遊牧民の存在は悩みの種であった，それゆえ，マムルーク朝は様々な方法で彼らを体制の中に組み込もうとした[17]。

659 (1261) 年スルタン・バイバルスは，ウルバーンのアミールたちを呼び出し，俸給とイクターを与えるとともに，イラク国境に至るまでのマムルーク朝内の諸道の警護を委ねた。そして，シリアの全ウルバーンの長としての統率権 (imra) を Sharaf al-Dīn 'Īsā b. Muhannā[18]に与えている。遊牧民の中で諸道の警護にあたる者たちは，arbāb al-adrāk と呼ばれていた[19]。エジプトにおいても，上エジプト方面に延びる幹線道路の安全の確保はウルバーンに委ねられていたが，彼らはイクターを与えられなかった[20]。

また，緊急の場合には遊牧民も補助軍として招集され[21]，前線に駆りだされていった。シャルキーヤ地方とシナイ半島の遊牧民のアミールたちはさらに，Bilbays-Dimyāṭ そして Bilbays-al-Kharrūba を結ぶバリード (駅逓) の馬を供給する義務を負わされていた[22]。

さて，スルタン・バイバルスがモンゴル軍と十字軍との戦いに忙殺されているとき，ヌビア王 Dāwūd が 671 (1272) 年に上エジプトに侵入し，アスワンやアイザーブを襲撃した[23]。これに対してマムルーク朝は，上エジプトの遊牧民を徴用してヌビア遠征を行った。674 (1275-76) 年の遠征[24]に次いで，686 (1287-88) 年には上エジプトの Awlād Abū Bakr, Awlād 'Umar, Awlād Sharīf, Awlād Shaybān, Awlād Kanz, Banū Hilāl などの遊牧民が政府による遠征軍に参加している[25]。688 (1289-90) 年のヌビア遠征には

上・下エジプトから4万人の遊牧民が参加している[26]。これらの遊牧民がどのような部族に属するものであったかについては，史料では確認できないが，その数はかなりのものであった。704（1304-05）年には上エジプトの相当数の遊牧民がヌビア遠征のためクースに集結している[27]。

ところで，これらの遠征軍には上エジプトのカフターン系の有力部族 Juhayna と Balīy の遠征軍への参加が確認できないということ，そして688年の遠征に動員されていないということが確実である点は重要であろう。マムルーク朝は，上記の比較的従順なアドナーン系の遊牧民を動員して彼らを懐柔し，マムルーク朝体制内に組み込もうとしたものと思われる。そのことにより，Juhayna と Balīy のようなカフターン系の遊牧民との力のバランスを図ったものと思われる。

このように，エジプトに移住してきた遊牧民は，マムルーク朝時代には，(1)諸道の警護，(2)補助軍，(3)バリードの馬の提供と管理など，様々な社会的役割を果たしていたといえよう。そしてそこには彼らを懐柔し体制内に組み込もうとしたマムルーク朝の政策的な配慮が見受けられる。

2.　反乱の背景

マムルーク朝時代を通じてアラブ遊牧民による多くの反乱が引き起こされた。これらの反乱は，*Sulūk* や *Badā'i'* などのマムルーク朝時代のいくつかの年代記史料のなかに記されている。表2はそれらに依拠し，マムルーク朝時代の主な反乱をまとめたものである。反乱は，その多くが，上エジプトでも下エジプトでもハラージュ徴収の妨害，穀物倉庫の襲撃，監察官（kāshif）の襲撃といった形態をとっている。史料では，大抵の場合 fasād　al-'urbān あるいは fi'l al-'urbān（遊牧民の反乱）として記述されている。

なぜアラブ遊牧民はマムルーク朝時代を通じて長い期間に亘り繰り返し反乱を起こしたのであろうか。彼らは固有の流動性，機動性のために体制に解け込むのを拒絶し続けたということも考えられる

表 2　マムルーク朝時代エジプトにおける主なアラブ遊牧民反乱

年月ヒジュラ暦	西暦	場所	形態	結末	出典
651年	1253年	al-Ṣaʿīd	マムルーク体制批判		*Sulūk* I, 386
660年	1262年	al-Ṣaʿīd	ウルバーンの暴動	クース総督al-Hawwāshを殺害	*Sulūk* I, 471
689年	1290年	al-Ṣaʿīd	ウルバーンの暴動	武器及び財産の没収	*Sulūk* I, 751
699年	1299－1300年	al-Buḥayra	穀物倉庫の焼き打ち		*Badāʾiʿ* I－1, 407
700年	1300－1301年	al-Buḥayra al-Wajh al-Qiblī	ハラージュの妨害	ウルバーンと農民からの武器狩り	*Sulūk* I, 914
701年	1301-2年	al-Wajh al-Qiblī	ハラージュの妨害	武器狩り	*Sulūk* I, 920－922
731年	1330-31年	al-Ṣaʿīd	ウルバーンの暴動		*Sulūk* II, 335
747年	1346-47年	al-Ṣaʿīd al-Fayyūm al-Iṭfīḥīya	ウルバーンの暴動		*Sulūk* II, 706
748年	1347-48年	al-Ṣaʿīd al-Fayyūm	ウルバーンの暴動		*Sulūk* II, 749
743～755年	1342-43～1354-55年	al-Ṣaʿīd	穀物倉庫襲撃	武器狩り，武器携帯禁止令	*Sulūk* II, 617－916 *Badāʾiʿ* I－1, 550-551
755年	1354-55年	al-Wajh al-Qiblī	監察官Tughāy殺害		*Sulūk* II, 907－908
780年	1378-79年	al-Buḥayra	穀物倉庫襲撃		*Badāʾiʿ* I－2, 235
782年	1380-81年	al-Buḥayra	穀物倉庫襲撃		*Badāʾiʿ* I－2, 279
784年	1382-83年	al-Sharqīya al-Gharbīya al-Ṣaʿīd	ウルバーンの暴動		*Badāʾiʿ* I－2, 310
792年	1389-90年	al-Ṣaʿīd	抗争		*Badāʾiʿ* I－2, 423
799年	1396-97年	全地域	ウルバーンの暴動		*Badāʾiʿ* I－2, 483
809年	1406-7年	アレッポ	エジプト農民にハラージュの支払拒否を要求		*Nujūm* 13, 58 *Sulūk* IV, 42
815年	1412-13年	全地域	反乱	飢饉と疫病で人口の2/3が死亡	*Sulūk* IV, 226－227
825年	1421-22年	al-Ṣaʿīd	Walī al-Qūṣ殺害	ハラージュの徴収が困難となる	*Sulūk* IV, 610

年月ヒジュラ暦	西暦	場所	形態	結末	出典
857年	1453-54年	al-Buḥayra	監察官Qa-shtam殺害		*Badā'i'* II, 314
868年	1463-64年	al-Buḥayra	ウルバーンの暴動		*Ḥawādith*, 458
872年	1467-68年	al-Buḥayra	穀物倉庫焼き打ち		*Badā'i'* III, 12-13
876年	1471-78年	al-Sharqīya	ウルバーンの暴動		*Badā'i'* III, 70-72
882年	1477-78年	al-Wajh al-Qiblī	監察官Sib-āyに対して		*Badā'i'* III, 143
892年	1486-87年	al-Sharqīyaからal-Gharbīyaまで			*Badā'i'* III, 237
904年	1498-99年	al-Buḥayra	監察官に対して反乱		*Badā'i'* III, 414

が，これらの反乱は，後述するようにマムルーク朝がアラブ遊牧民に対して行った弾圧政策によって引き起こされていることや，ルイIX世のダミエッタ攻撃，モンゴル軍のシリア侵攻，あるいは自然災害といった，マムルーク朝が内外からの脅威のために危機的状況に陥ったときに起こっている点に注目しなければならないであろう。

(1)　マムルーク朝の弾圧政策

マムルーク朝成立直後の651（1253）年，アイバクの治世（在位1250-57）に，上エジプトのアラブ遊牧民がḤiṣn al-Dīn Tha'lab al-Ja'farī を指導者として反乱を起こし，ハラージュの徴収を拒否した。反乱の根拠は「我らこそ国土の持主だ」「我こそマムルークより王たるにふさわしい。（我らは）アイユーブ朝に奉仕しただけで十分だ。彼らは我らが国土に攻め込んできた異民族の奴隷にすぎない」という点にあった[28]。遊牧民たちはDahrūṭ SarabānのḤiṣn al-Dīnのもとに集結した。反乱は上エジプトからブハイラ地方，ファイユーム，ギザにまで拡大した。反乱軍は騎兵1万2千騎，歩兵は数え切れないほどに膨れあがっていた。Ḥiṣn al-Dīnは，アイユーブ家の一族でダマスクスの君主のal-Malik al-Nāṣirに，エジプトに来て反乱に参加するよう呼びかけている。このように，この反乱はきわめて政治的なものであったといえよう。これに対し，スルターン・アイバクはアミールFāris al-Dīn Aqṭāyと5千騎を上エ

ジプトに派遣し，反乱を鎮圧した。

だが，アイバクはこの勝利には満足せず，遊牧民を弾圧する政策を行った。彼は Ḥiṣn al-Dīn にアマーン（安全保障）を与え，彼と彼の配下の者にイクターを与える約束をし，彼を Bilbays に招いた。これを計略とは知らず，彼は2千人の騎兵と6百人の歩兵を引き連れて到着した。しかし，彼らは全て捕えられ，カイロと Bilbays を結ぶ道路に設置された木につるされ処刑された。さらに，アイバクはアラブ遊牧民たちにカティーア al-qatī'a（ここでは，スルターンが毎年各地方から，及び戦時などに徴収する特別税を意味する）と，カウドゥ al-qawd（遊牧民の諸部族からスルターンに送られる贈物で，馬やラクダその他の役畜を意味する）の増額を命じたのである[29]。これに反発した遊牧民たちは，660（1262）年についに上エジプトのクースで反乱を起こし，クース総督 'Izz al-Dīn al-Ḥawwāsh を殺害した[30]。

このように上エジプトのアラブ遊牧民が，当初マムルーク政権に対して行った反乱は，マムルーク朝政権の正当性を問う政治的な運動であった。これに対してマムルーク朝は，アラブ遊牧民に厳しい弾圧政策をもってのぞみ，その弱体化を図った。だが，アラブ遊牧民はマムルーク朝のこうした政策には反抗的で，その後も反乱を繰り返した。

(2) 軍事遠征費の調達

一方，マムルーク朝は13世紀から14世紀初めにかけてガーザーン・ハン率いるモンゴル軍や十字軍との対立で政状が極めて不安な状態にあった。そして軍事遠征費や物資及び兵員の獲得をあらゆる手段を使って行わなければならなかった。こうした費用や物資の調達は遊牧民にまで及んでいた。700（1300-01）年にガーザーン・ハンがシリアに侵攻すると，スルターン・ナースィルはワズィールのシャムス・アッディーン Shams al-Dīn Sunqar al-A'sir とカイロ総督のナースィル・アッディーン Nāṣir al-Dīn Muḥammad b. al-Shaykhī に命じて特別税の徴収を行った。まず，不動産の持主と富裕層に課税が行われた。次いで一般の人々にも個々割り当てら

れ，カイロ，フスタート，上エジプト，下エジプトから100,000ディナールが徴収された。マクリーズィーはこの課税が人々に大変な負担であったと記している[31]。そして，上エジプトの遊牧民もこの課税の対象となったことがわかる。Baybars al-Manṣūrī によれば，同年ワズィールのシャムス・アッディーンは Manfalūṭ に赴き，遊牧民の有力者たちを招集し彼らに対する課税額を決定した。それは150万ディルハム，馬千匹，ラクダ千匹，羊１万匹であったという[32]。

これに対して，同年 al-Buḥayra 地方の遊牧民たちは，この課税に反対して蜂起し，反乱は上エジプトにまで拡大した。Kanz によれば，このとき遊牧民は上エジプト全域で，アミールやその他の軍人たちのイクターやハラージュを妨害したことが分かる[33]。だが，反乱はマムルーク朝の軍隊によって制圧されることになった。これについてマクリーズィーは次のように記している[34]。

> この年［700/1300-01年］ワズィール・シャムス・アッディーンは遊牧民の暴動を鎮圧するため，数百のスルタンのマムルークを率いて上エジプトに向かった。彼らの略奪や暴動が頻発し，彼らの多くがハラージュの徴収を妨害した。シャムス・アッディーンは上エジプトの村々の多くを攻撃し，騒乱者を殺した。そして，村にいた馬を全て捕獲し，農民にも，遊牧民にも，裁判官にも，法学者にも馬の所有を許さなかった。彼は農民と遊牧民が持っていた武器を最後に至るまで追求した。彼はクースからカイロに帰還した。1060頭の馬，870頭のクラダ，1600本の槍，1200の剣，700の盾，6000匹の羊を捕獲していた。村々で行われていた悪事が止んだ。農民はおとなしくなりハラージュを支払った。

このように，反乱は上エジプトの村々に広がったが，その中心はマンファルートからクースにかけてであり，このことから，マムルーク朝に反抗的な Juhayna と Balīy がこの反乱の主体であったと推測される。彼らはハラージュの徴収を妨害することでマムルーク朝に抵抗したのである。そしてこの反乱は，マムルーク朝の派遣し

た鎮圧軍による武器狩りという結末で一旦は収まったが，翌701年[1301-02年]，上エジプトの遊牧民は再び大規模な反乱を起こした。彼らはマムルーク朝の支配を見下し，アシュートとマンファルートで商人や職人に対し人頭税に似た課税（shibh al-jālīya）を行っている。また，自らをアミールと名乗る者も現れた。一人はBaybarsと名乗り，もう一人はSallārと名乗った。これに対して，マムルーク朝は鎮圧軍を組織し，四方面から上エジプトを包囲する手段を取り，ナイル河の西岸の砂漠を南下し，一方では東の砂漠を横切り，ナイルを船で渡り，上エジプトへの通常の交通路を経由して上エジプトに向かった。鎮圧軍は迅速に移動し，上エジプトの村々を急襲し，ギザとイトフィーフでは住民を完全に包囲し，1万人ほどの男を集めた。そして，アラビア語で“daqīq（小麦粉）”という言葉を発音させ，qāfを発音した者を殺害した。すなわち，アラブ遊牧民とそれ以外の住民を識別するためであった。そして，クースに至るまで隠れていた遊牧民は引き出され殺害された。さらに彼らの所有物である，1万6千匹の羊，4千頭の馬，3万2千頭のラクダ，8万頭の牛を没収した(35)。

以上のように，アラブ遊牧民が起こした反乱の背景には，反抗的な彼らに対してマムルーク朝がとった弾圧政策と，多大な徴税があったと言えよう。そして，マムルーク朝が行った執拗な制圧が新たな反乱を生み出したのである。

3. アフダブの反乱（743/1342-43—755/1354）

スルターン・ナースィルの治世に発生したアラブ遊牧民による反乱は，それ以前に起こった反乱とは異なった性格をもっていた。すなわち，この時期の反乱には，アッバース朝支配時代のコプト教徒の農民による抗租反乱以来はじめて農民（fallāḥūn）が参加したからである(36)。それでは，なぜ上エジプトで起こった遊牧民反乱がこの時期に変化したのかをここでは明らかにしたい。

まず最初に，マムルーク朝時代の上エジプトの農民について一言触れておきたい。アラブのエジプト移住と農村への定着により，従

来のコプト教徒の農村社会が除々にアラブ化，イスラーム化していったのであるが，アッバース朝初期には上エジプトの農民は大半がまだコプト教徒であった[37]。ところがマムルーク朝時代になるとコプト教徒は国家の宗教政策によってイスラームへの改宗を余儀なくされる。755（1354）年には，ムスリムのエジプト征服以来エジプト宗教史の転換点ともいえるような極めて大規模な改宗が行われた。マクリーズィーは，彼らが経済的に苦境に陥り，教会が破壊され，ムスリム社会のなかに埋没していったことを記している[38]。したがって，上エジプトにおいて遊牧民の反乱に参加した農民はまさにこうした激動期の農民であった。

マムルーク朝スルタン，ナースィル・ムハンマド al-Nāṣir Muḥammad の第3回目の治世（709年～741年）は，上エジプトにおいて731年に起こった遊牧民の暴動は別として平静な時期であった[39]。しかしその治世が終わると，マムルーク朝政権の屋台骨をゆるがすような大反乱が上エジプトで発生した[40]。まず，743年に遊牧民による小さな暴動が上エジプトで発生した。翌744年にはそれがさらに拡大した[41]。マクリーズィーは，どのような部族がその暴動に参加していたのかを記述してはいないが，この鎮圧の方法にマムルーク朝政権のアラブ遊牧民政策の特徴がはっきりと現れていた。すなわち，鎮圧を委任されたアミールのアラー・アッディーン ‘Alā’ al-Dīn は，反乱者たちに対して，彼らに敵対する部族を率いて立ち向い，一応その目的を達成した。だが，745年には暴動はさらに拡大した。*Sulūk* は次のように記している[42]。

> 上エジプト方面のウルバーンの不正の知らせが届いた。諸道が寸断され，彼らの間で抗争がおよそ二月続いた。その中で民衆（khalq）が多く殺された。ファイユームのアラブはお互いを攻撃した。赤子が母親の腕の中で喉を切られ，多くの人々が殺された。彼らはハラージュの徴収を妨害した。

これによれば、この抗争の中心はファイユームであり，遊牧民の間で内部抗争が行われたことが分かる。このような抗争は数年に亘り，747年にはサイードやイトフィーフにも拡大した。そして，サ

イードとファイユームの遊牧民が同盟を結んで結束したため，反乱は激しさを増した。その間マムルーク朝は，ある時は，遊牧民たちがお互いに戦い合うにまかせ，またある時はイクターを保護するためアミールたちを派遣して介入した[43]。749年には対立する‘Arak族とHilāl族の勢力範囲の間で，上エジプト監察官トゥギーṬughīhが殺害された。そして，アシュート襲撃が開始され，中エジプトの先端ジュハイナJuhayna地域が新たに反乱の中心地となった。この反乱では基本的には二つのグループが対立した。すなわち，Hilālと‘Arakである[44]。

マムルーク朝政権は，これらの闘争を鎮圧する有効な方法をもっていなかったが，少なくとも一時的な方策として，以前から行われていた遊牧民対策を用い，彼らを懐柔することに成功した。すなわち，カフターン系遊牧民とアドナーン系遊牧民の対立関係をうまく利用し，Hilālからも支持を得たのである。Hilālはカフターン系の遊牧民と対立していた。その対立の構造は，上エジプトの北部はカフターン系の勢力範囲で，Juhayna, ‘Arak, Balīyの拠点であった。一方，上エジプトの南部，すなわちクースからアスワンにかけてはアドナーン系の拠点で，Hilāl, Kanzが勢力をもちマムルーク朝政権に比較的協力的であったといえよう。そして，政府は752年にはこの対立関係を利用することでかなりの成功を得た。しかしこの年にはal-‘Āyid族，Tha‘laba族などが新たに反乱に加わった。また，シリアの‘Ashīr族も暴動を起こし，カイロやフスタートでも焼き打ち事件が多発し，かつて例がないほどの破壊が行われ，エジプトやシリアは大混乱に陥った。そしてこの時，‘Arak族を闘争に導いた者の名，すなわちアフダブIbn Wāṣil al-Aḥdabが初めて登場する[45]。これに対してマムルーク朝は，監察官のアズダマル‘Izz al-Dī Azdamarを差し向け‘Arak族の鎮圧に当らせた。アフダブはマムルーク朝の軍隊と交戦の後，山岳地帯に逃げ込んだ。アズダマルは‘Arakと敵対関係にあるHilālに援軍を求める一方，アスワン付近を拠点とするKanz族に‘Arakの南方方面への退却路を塞ぐように求めた。アズダマルはイトフィーフの知事（mut-

awallī）のウスナダマル Usnadamar と共に ‘Arak が潜んでいる山岳地帯に向かった。アフダブは大挙して彼らを待ちうけていたが敗北を喫した(46)。

翌754年になると，ギザ，バフナサー，ファイユームで起こった反乱に，農民と思われる民衆（ahl）が参加した。反乱は鎮圧され，馬や武器が捕獲されたが，ギザでは農民に対して，ハラージュを支払うために彼らが所有している馬をスークで売却する布告が出された(47)。しかし755年になると，反乱はついに頂点に達した。マクリーズィーは同年に至るまでの上エジプトの遊牧民の反乱を総括して次のように記している(48)。

> この年シャッワール月28日，アミール・シャイフー Sayf al-Dīn Shaykhū al-‘Umarī は上エジプトに向かった。上エジプトの遊牧民が支配を脱しお互いに血を流したという知らせが届いたからである。彼らは交通路を遮断し，人々の財産を奪い，アミールや軍隊の穀物倉庫を壊した。さらに，監察官 al-kāshif のトゥガーイ Ṭughāy を殺害した。さらに，後を受け継いだ監察官ヒズバーニー Majd al-Dīn Mūsā al-Hidhbānī を襲撃した。およそ2000人の男が殺され，村々が襲撃され，殺人と略奪が続いた。この不幸は上エジプトでこの年ずっと続き遊牧民の多くが死んだ。人々（khalq）もこの反乱に参加した。彼らは監察官バイブガー Baybughā al-Shamsī のもとに押し駆け彼と戦った。この反乱に人々が集まった。そこでアフダブは立ち上がった。……

以上のことを整理すれば，上エジプトの遊牧民は数年に亘り反乱を起こし，イクター保有者の穀物倉庫を襲撃したことがわかる。彼らは上エジプトの徴税の監督に当っていた監察官 Ṭughāy を襲撃および殺害することで，マムルーク体制に抵抗したといえよう。すなわち，これらの反乱が起こる前の731年に新しく創設された上エジプト監察官 kāshif wajh al-qiblī による，マムルーク政権の上エジプト支配の強化によって生じた軋轢がこれらの反乱の原因であるといえよう。また，そのほとんどが農民と推測される民衆がこの反

乱に参加した。そして，アフダブがこの反乱の統率者となり，スルタン位に挑み，反乱は最高潮に達した。

これに対して，スルターン・サーリフ（在位1351-54年）は，上エジプトの遊牧民に対して大遠征軍を組織し，アミールたちは，ファイユーム，イトフィーフ，クース，ヌビアとの国境方面へと向かった。また，スルタンも自ら軍を率いて出陣し，ギザでは馬や剣をことごとく捕獲した。ワーリーと遊牧民のシャイフが呼び出され，逮捕した者どもを検分させ，顔見知りのものは解放し，見知らぬ者は投獄した。また，農民にもそれぞれ所有する馬を確認させ，それをスークで売却させ，その代金でハラージュを支払わせた。次いでスルタンはバフナサーに向かった[49]。

アフダブは彼の周りにKalb族，Juhayna族，'Arak族を結集させた。そして武装騎馬勢力１万人以上，歩兵勢力は数え切れないほどに膨れ上がっていた。アフダブは彼等の家畜，財産，女子供まですべてを集めマムルーク軍を待ち受けた。カイス系の部族はマムルーク朝への最大限の支持を引き出そうと努力をした。アミール・シャイフーはさしたる困難もなくワーリーや監察官たちと共にアシュートにたどり着いた。しかしながら，この度はマムルーク軍は大挙してやってきており，ついに遊牧民たちにマムルーク朝軍隊の力をみせつけた。遊牧民の多くが殺され，捕虜となったため，アフダブは南方への退却を余儀なくされる。シャイフーはアフダブを追跡しアスワンで追い着き，彼の集団の多くを殺した。アフダブは最終的に敗北した。だが，討伐軍のアミール，シャイフーに信頼のあるシャイフAbū al-Qāsimの執り成しにより，混乱した上エジプトの再建に従事するという条件で，アフダブは755年に服従を誓い，それ以来イクターを授与され，上エジプトの秩序の維持と税の徴収を任されている[50]。このように，この反乱はマムルーク朝政権によって徹底的に制圧された。以後，しばらくは上エジプトの遊牧民の反乱は史料の中には現れてこない。またこの反乱に関してマムルーク朝後期の歴史家イブン・イヤースは次のように記している[51]。

アミール・シャイフーは農民を見つけるとその首をはねた。さ

らに，上エジプトのダイア（農村）にいた遊牧民と農民の首をはね続けた。それはかつてフラグがバグダードでしたように首塚がナイルの岸辺にできるほどであった。……（中略）……スルタンはカイロで布告を出した。農民は馬に乗るべからざること。武器を買うべからざること。剣や槍を買うべからざること。

上記の引用文からも推察できるように，これは遊牧民によって引き起こされた反乱であったが，農民反乱的色彩を帯びていたことも事実である。農民は遊牧民と共に武器を取り，マムルーク体制に反対して反乱に参加したことが分かる。

それでは，この時期に上エジプトの農民が反乱に参加したのはなぜであろうか。そのためには，人為的要因と自然的要因を考える必要がある。人為的要因としては，上エジプトではイクター保有者はイクター収入を現物で受取り，下エジプトでは小作料の徴収は金納で行われたため，下エジプトの農民はイクター保有者によって決められた価格で収獲物を売らなければならなかった。また下エジプトにおけるハラージュの税額も，穀物の価格が決定された後に決められた。この価格決定においてはイクター保有者たちの思惑がはたらき，イクター保有者たちは彼らの小作人を搾取する機会を得たのである。そして，イクター保有者たちに農作物の価格の支配を可能にさせたものは，穀物商人による穀物の買い占めであった。上エジプトでも，穀物は商人によって買い占められ，また収穫前の先物買いも行われ，上エジプトから船でカイロのブーラークにある穀物河岸（sāḥil al-galla）に運ばれた。こうして組織的飢餓に陥った農民は，ハラージュの支払を拒否して遊牧民によって引き起こされた反乱に参加したのである[52]。

自然的要因についていえば，疫病の流行，ナイルの水位の異常などがこの時期に相次ぎ，農業生産の急激な低下をもたらし，農民を窮乏させた。特にエジプトを襲った鼠の害は深刻であった。696（1297）年には収穫前に大量発生した鼠は一晩で一つの村のおよそ50フェッダーン（32ha）の穀物に被害を与える程であった。

715（1315）年には鼠が上エジプトの農村を襲った。Manfalūṭ の Umm al-Quṣūr 村では，7日間で326-2/3アルダッブ（90*l*）の鼠を捕獲したと記されている。738（1337-8）年にも Manfalūṭ 地方は被害を被った。収穫前の穀物と穀物倉庫も被害を受けた。一晩で一つの穀物倉庫の4分の1が荒らされた。そして Manfalūṭ だけで，スルタン・ナースィルのための豆の収穫物が60,000アルダッブ損害を被った[53]。

さらにこれに追い打ちをかけるように，黒死病が蔓延した。エジプトに黒死病が伝わったのは748（1347）年だといわれている。上エジプトには翌年末749（1349）年に広まった。アシュート地区では通常およそ6,000人からハラージュを徴収していたが，病気が蔓延すると116人からしか徴収できなかった。また，黒死病は動物にも伝染した。特に農耕に使われた jamūs と呼ばれる水牛の死は，農業生産に大きな影響を与えた[54]。

このように自然災害による急激な農業生産の低下と，農村人口の減少，そして遊牧民による農村の略奪に加え，穀物の買い占めによる組織的飢餓に困窮した農民は徴税に反対して反乱に参加したといえよう。結果的にみれば，この反乱は農民が主体となって起こした反乱ではなく，農民反乱的色彩も帯びてはいるが，やはり遊牧民主導の反乱であり，マムルーク体制に対する不満が爆発した反乱であったといえよう。

4. マムルーク朝の上エジプト支配

上エジプトは，マムルーク朝政権の本拠地カイロからは離れており，またマムルーク朝の支配に反抗的なアラブ遊牧民が多く居住しており，政権を樹立したばかりのマムルーク朝にとっては統治しにくい地域であった。しかし，南方方面や紅海方面に向かう戦略的な要衝として，マムルーク朝はクースを上エジプト支配の拠点としなければならなかった。

すでに述べたように，政権樹立直後の651年に上エジプトで Ḥiṣn al-Dīn に率いられたウルバーンの大反乱があった。スルタン・アイ

バクは Fāris al-Dīn Aqṭāy と 'Izz al-Dīn al-Aframを鎮圧軍の指揮官として上エジプトに派遣した[55]。反乱を制圧したアフラムはクースに留まり，初代クース総督（wālī al-Qūṣ）として任命され，上エジプトにおけるマムルーク朝の支配体制の維持に力を注ぐことになった。こうしてマムルーク朝は上エジプト支配の基礎を確立した。マムルーク朝がいかに上エジプト支配を重要視したかは，各地方行政区に派遣される総督の任命のあり方に現れている。クース総督は40人長クラスのアミールの中から選ばれ，その地位は上エジプトの全ての区域の総督の中で一番重要なポストであった[56]。664年には 'Alā al-Dīn がクース総督に任命されたが，この時からイフミーム総督を兼ねることになった[57]。680年には 'Izz al-Dīn Aybak al-Fakhrī が任命されたが，彼はカイロ総督に就任した後にこのポストに就いている[58]。これは，上エジプトの総督職が徐々に重要さを増してきたことを示している。

上エジプトにおける遊牧民の反乱，とりわけアフダブの乱においては，アシュート周辺がその中心地域となり，スルタン・ナーシル・ムハンマドの効果的な支配以降は，クースは遊牧民の反乱の舞台とはならなかった。したがって，遊牧民の反乱を鎮圧するための軍隊の集結する場所としての機能を十分に果たしていた。クースの総督は上エジプトにおいて，遊牧民に対する見張役を果たしていた[59]。701年には反乱鎮圧のためカイロから軍隊が派遣されて来たが，鎮圧の指揮を任されたのは，逃走する遊牧民を追跡するためその地域を良く知っているクースの総督であった。その後暫く平静な時期が続いたが，731年の暴動の際には，クース総督に替わり混乱した秩序の維持をはかる官職が創設された。すなわち上エジプト監察官（kāshif al-wajh al-qiblī）であり[60]，その任務を請われたのはシャルキーヤのムタワッリー（mutawallī，知事）を務めるズルザイ Ẓulẓay であった。

この監察官の職（kashf）は，マムルーク朝初期にはカイロ在住のアミールたちが任命された任期一年の官職で，その任務は提防の管理，運河の浚渫などであった[61]。この活動は収穫の後で行われ

たので，特に上エジプトではその一部が租税となる収穫物の収集の監視は，彼らにとっては不正に着服することが可能であったため，彼らがそれに熱意を示したことは言うまでもない[62]。したがって，租税徴収の監督と保護のこの任務は，彼にその秩序を乱す者に対抗する権力を与えた。それゆえ，危機的状況が強まるに従って，この監察官の地位は総督のそれを上回り，このポストの任命が他のポストの任命に先んじることになった。そして731年にはズルザイの死後，クースの総督であったガルス・アッディーン Ghars al-Dīn Khalīl が任命され[63]，748年にはやはりクースの総督であったトゥガーイ Ṭughāy が任命されている[64]。749年にトゥガーイがアシュートで遊牧民によって殺害されると，彼の後継者は751年にアシュートを奪回し抵抗の拠点とした[65]。同様に754年にはアミール・シャイフーは遠征隊を率いてアシュートにやって来てここを拠点とした[66]。監察官の任務は中エジプトにまで拡大されたのである。その後，マクリーズィーによれば769年にアミール・アイダムル Aydamur が[67]，774年にはクースの総督であったアミール・クルターイ Quruṭāy al-Karakī が[68]，776年には任務がギザからアスワーンまで拡大されてアミール・ファフル・アッディーン Fakhr al-Dīn が，このポストに任命されている[69]。このようにカーシフの設置はマムルーク朝政権にとって，遊牧民の略奪からハラージュを守るためにどうしても必要であったのである。そしてまたそれは，マムルーク朝政権の上エジプトの支配体制の強化の現れでもあった。

おわりに

以上から14世紀中頃までの上エジプトにおけるアラブ遊牧民の反乱をみてきたが，これらの反乱は，初期にはマムルークという異民族によるイクター制に基づく支配体制に不満をもつアラブ遊牧民によって引き起こされた極めて政治的な運動と理解することができる。マムルーク朝は，様々な方法で支配に服さない彼らを体制の中に組み込もうとするとともに，体制に反抗的な遊牧民に対して弾圧政策をもって臨みその弱体化を図った。しかしながら，こうした政

策はかえって彼らの反発を招き，度重なる反乱を引き起こすことになった。だが，各反乱はそれぞれが孤立し，統合を働きかける動きが全くなかったわけではないが，農民や奴隷やその他の社会体制に不満を持つものが統合して反乱を組織することはなかった。

たしかに，スルタン・ナースィルの治世に起こった反乱には農民の参加がみられた。おそらく，遊牧民と農民の間には一時的ではあったが，遊牧民によるマムルーク政権への抵抗という政治的な目的と農民による抗租という経済的な目的が一致する部分があって，それが彼らの共通の敵であるマムルーク体制に対する反乱となって結集していったといえよう。だが，マムルーク朝は反乱を制圧する過程でカーシフを配置し，上エジプト支配を一層強化することに成功したのである。

註

(1) Poliak, A. N., Les révoltes populaires en Égypte à l'époque des Mamelouks, *Revue de Etudes Islamiques*, vol. 8, 1934, pp. 251-271.

(2) Garcin, J. C., Note sur les raports entre Bédouins et fellahs à l'époque mamluke, *Annales Islamologiques*, vol. 14, 1978, pp. 147-163. Garcin, J. C., *Un centre musulman de la Haute-Égypte médiévale : Qūṣ*. Caire, 1976, pp. 359-410.

(3) Saleh, A. H., Quelques remarques sur les Bédouins d'Égypte au moyen age, *Studia Islamicus*, 48, 1978, pp. 45-70.

(4) エジプトはファラオ時代以来，上・下エジプトに区分されていた。上エジプトはサイード Ṣa'īd と呼ばれる。Yāqūt によると，Ṣa'īd はさらに，1) 下 Ṣa'īd (カイロから al-Bahnasā まで)，2) 中 Ṣa'īd (al-Bahnasā から Ikhmīm まで)，3) 下 Ṣa'īd (Ikhmīm から Aswān まで) に分類される。また上エジプトは Wajh al-Qiblī とも表現される。Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, vol. III, p. 408, Beirut, 1979.

(5) サーリフはこれらの史料に基づき，中世エジプトにおけるアラブ遊牧民の移住を次の論文にまとめている。Saleh, A., Les migrations Bédouines en Egypte au Moyen Age, *Annali*, Istituto Orientale di Napoli, vol. 41, 1981, pp. 1-33.

(6) 表1は便宜上，横軸はマムルーク朝時代の地方行政区分にしたが

い，縦軸はカフターン（ヤマン）系遊牧民とアドナーン（カイス）系遊牧民に分類した。なお，これらのアラブ遊牧民の他に，Lawāta, Hawwāra などのベルベル系遊牧民もエジプトに移住してきたが，本稿では割愛した。

（7） 余部福三「ウマイヤ朝期のシリアにおけるカイスとヤマンの闘争について」『東京経済大学人文自然科学論集』第85号，1990年。

（8） この分布図は表1と対応するようになっている。見やすくため，地名は仮名で，部族名はローマ字で表記した。なお，部族名を表す文字の大きさは部族勢力の大きさをも示している。

（9） al-Maqrīzī, *Bayān*, p. 35.

(10) al-Qalqashandī, *Nihāya*, p. 180. *Qalā'id*, p. 42.

(11) *Bayān*, pp. 36-38.

(12) *Bayān*, pp. 38-46.

(13) *Bayān*, p. 36.

(14) *Bayān*, p.48.

(15) アラブ遊牧民を表す言葉は，史料の中では ‘arab と ‘urbān が使われている。ポリアクは半農半牧の生活をする遊牧民をウルバーンと定義しているが，両者は史料のなかでも明確な区別がなされておらず，時にはどちらもアラブ遊牧民という意味のほとんど同義語として使われている。だが，ウルバーンという言葉には，ガルサンが指摘するように，緩やかな定住をする半牧民に対する軽蔑の意味が込められているようである。Ashtor, E., *A Social and Economic History of the Near East in the Middle Ages.* Berkeley-Los Angles, 1976, pp. 285-288. Garcin, J. C., *Un centre musulman de la Haute-Égypte médiévale : Qūṣ.* Gaire, 1976, p. 362.

(16) Garcin, ibid., p. 191.

(17) マムルーク朝によるアラブ遊牧民の様々な起用については，佐藤次高『中世イスラム国家とアラブ社会』1986年，山川出版社，184-189頁参照。

(18) *Sulūk*, I, p. 465. 佐藤，前掲書，187頁. ‘Isā b. Muhannā はシリアの Āl Faḍl 族の族長で，アイン・ジャールートの戦いでマムルーク軍に混じってモンゴル軍と戦い重要な役割を演じ，サラミーヤにイクターを授与されている。

(19) *Nujūm*, VIII, p. 205.

(20) *Ṣubḥ*, VIII, pp. 5-6, Ayalon, The auxiliary forces of Mamluk Sultanate, *Der Islam*, vol. 65-1, 1988, p. 23.

(21)　マムルーク朝の補助軍は，ウルバーンの他に，トゥルクマーン，クルド，Ashīr（シリアに住み普段は農耕に従事する遊牧民），シリアの Jabalīya と呼ばれる山岳民，Muttawi'a（ボランティアによる一般市民）で構成された。これらの中でも重要な役割を果たしたのはトゥルクマーンであった。Ayalon, ibid., pp. 13-37.

(22)　スルタン・バイバルスはシリア，エジプトを含むマムルーク朝領内にバリード網を張り巡らして，交通路の整備と各地の情報収集を行い中央集権的な体制の確立をはかった。このため，遊牧民による馬の提供とその管理が必要であった。*Ṣubḥ*, III, p. 458; XIV, pp. 366-388. *Ta'rīf*, pp. 239-253. 研究書として次の文献を参照。Sauvaget, *La poste aux chevaux dans l'empire des Mameloukes.* Paris, 1941. Sa'dāwī, N. H., *Niẓām al-Barīd fī al-Dawla al-Islāmīya.* Cairo, 1953.

(23)　al-Qūṣī, A., *Ta'rīkh Dawla al-Kunūd al-Islāmīya.* Cairo, 1981, p. 86.

(24)　Ibn al-Furāt, VII, p. 46. *Sulūk,* I, p. 621.

(25)　Ibn al-Furāt, VIII, p. 52. *Sulūk*, I, p. 737. これらの遊牧民は 'urbān al-iqlīm と総称されている。

(26)　Ibn al-Furāt, VIII, p. 82. *Sulūk*, I, p. 749.

(27)　*Salūk*, II, p. 7.

(28)　*Sulūk*, I, p. 386. 佐藤，前掲書，186頁。

(29)　*Sulūk*, I, p. 388.

(30)　*Sulūk*, I, p. 471.

(31)　*Sulūk*, I, p. 907. ワジールの Shams al-Dīn Sunkar al-A'sar とカイロ総督 Nāṣr al-Dīn Muḥammad b. al-Shaykhī が徴税を任された。ダマスクスでは不動産，ワクフの賃貸料の 4 ケ月分が徴収された。農地は 1 Mady につき 6-1/3 ディルハム，農民は 1 年の収穫物の98%分を徴収された。また，富裕者たちからは所持金の 1/3 が徴収された。したがって民衆にとってはこれは大変な苦痛であった。それゆえ多くの人々がエジプトに逃亡した。

(32)　Baybars-al-Manṣūrī, fol. 223.

(33)　*Kanz*, IX, p. 63.

(34)　*Sulūk*, I, p. 914.

(35)　*Sulūk*, I, pp. 920-22.

(36)　ウマイヤ朝からアッバース朝にかけての抗租運動については，森本公誠著『初期イスラム時代のエジプト税制史の研究』（1975年，岩波

書店 pp. 171-206）に年代順に詳しい研究がなされている。これによれば，この時期の抗租運動はその主体がコプト教徒の農民であり，税務行政の強化と税制改革による税務行政の不統一にその原因を見いだすことができる。マムルーク朝時代になると，十字軍やモンゴル軍との戦いにより，イスラム世界意識が芽生え，マムルーク朝の宗教政策によりコプト教徒はイスラムへの改宗を迫られた。一方，アラブ遊牧民に対しては弾圧と定住化政策が強化された。こうして，アラブ遊牧民とコプト教徒の農民は団結して税租運動を展開したといえよう。

(37) 森本公誠，同掲書，p. 177.

(38) 同年マムルーク朝は，教会や修道院のワクフ財産を没収した。そしてその中から25,000フェッダーンの土地をアミールと何人かのファキーフにイクターとして配分した。また，上エジプトでも下エジプトでも数多くのコプト教徒が改宗し，Qalyūb では一日だけで450人がイスラムに改宗した。そしてこれがエジプト史において重大な出来事であったと記している。*Sulūk*, II, p. 927. Donald P. Little, Coptic conversion to Islam under the Baḥrī Mamlūks, 692-755/1293-1354, *Bulletin of the Sohool of Oriental and African Studies*, 39, 1976, pp. 552-69.

(39) *Sulūk*, II, p. 335.

(40) *Sulūk*, II, p. 617.

(41) *Sulūk*, II, p. 656.

(42) *Sulūk*, II, p. 668.

(43) *Sulūk*, II, pp. 706-7. この反乱の鎮圧軍の司令官 Ghurlū はイトフィーフに向かった。彼はアラブのシャイフ Mughnī をだまし逮捕したため，反乱が強まった。この反乱でおよそ 2 千人が殺されたという。

(44) *Sulūk*, II, p. 770. 上エジプト監察官 Ṭughīn は748年にクース総督に任命され，同年上エジプト監察官に昇進している。

(45) *Sulūk*, II, pp. 843, 855-6.

(46) *Sulūk*, II, pp. 855-6. アフダブは監察官の Azdamar が上エジプトを離れると報復のためヒラールの支配地域を攻撃した。

(47) *Sulūk*, II, p. 899.

(48) *Sulūk*, II, pp. 907-8.

(49) *Sulūk*, II, pp. 908-10.

(50) *Sulūk*, II, pp. 911-16. アフダブはその後799年まで生きのび，上エジプトで殺害されている。

(51) *Badā'i'*, I-1, pp. 550-51.

(52) Poliak, op. cit., pp. 260-261. Lapidus, I. M., The grain economy of Mamluk Egypt, *JESHO*, vol. 12, 1969, pp. 1-15.

(53) Rabi, H. M., Some technical Aspects of Agriculture in Medieval Egypt, A. C. Udovitch ed., *The Islamic Middle East 700-1900*. Princeton, 1981, p. 79-80.

(54) Dols, M. W., *The black death in the Middle East*. Princeton, 1977, pp. 160-5.

(55) Ibn al-Furāt, VIII, pp. 215-16.

(56) *Ṣubḥ*, IV, p. 26.

(57) *Sulūk*, I, p. 703.

(58) ibid.

(59) Garcin, op. cit., p. 386.

(60) *Sulūk*, II, p. 335. ズルザイは728年にシャルキーヤの総督に就任している。

(61) カーシフは本来，農地や土手の状態を管理することを任務としていた。それゆえ，最初は Kāshif al-turāb（農地の監察官）と呼ばれていた。灌漑土手の管理に関しては，カーシフは「スルタンの灌漑土手」に堆積した泥を浚渫する義務があり，またナイルの増水時には，土手が決壊して耕作不能な農地ができないように葦の束で土手を補強する義務があった。「むらの灌漑土手」はムクターが管理し，カーシフの管理下にはなかった。カーシフは上エジプトではファイユーム，下サイード，上サイード，下エジプトではシャルキーヤとガルビーヤに置かれていた。*Zubda*, pp. 129-30.

(62) *Ṣubḥ*, IV, p. 158.

(63) *Sulūk*, II, p. 340.

(64) *Sulūk*, II, p. 750.

(65) *Sulūk*, II, p. 820.

(66) *Sulūk*, II, p. 850.

(67) *Sulūk*, III, p. 160.

(68) *Sulūk*, III, p. 202.

(69) *Sulūk*, III, p. 234.